

文学的文章の読みにおける読者の自己内対話に関する研究

—大学生の「藤島さんの来る日」に対する反応分析を手がかりに—

武田 裕 司

1 問題の所在

国語科は「ことばの力」を育てることを目的とする教科であるとされ、特に読むことの領域においては「自立した読者」の育成が目指されてきた。この「自立した読者」という概念に関して山元隆春(1994)は、「社会生活の中で、一人で読むための力を子どものものにしていく」ことを読みの教育の意義として重視しており、「自立した読者として学習者を育てていくには、読むことについての意識を学習者の内に育てていく必要がある」と述べている。このことから、読むという行為を通して自らを振り返ることや社会との相関の中で自らを捉えることを「ことば」によって行うことのできる学習者の育成が目指されているといえる。しかし、現代社会においては「自己」をめぐる問題は複雑化していることが船津(2011)や溝上(2008)らによって指摘され、自己の複数性に関する言及が多くなされている。

このような現状の中、「自立した読者」を育てていく上で文学的文章のもつ価値は大きいと言える。文学的文章を読むという行為は、読者自身を振り返る、また「私」という存在について追究する契機となりうるものである。

しかし一方で、このような文学的文章を国語科の授業において用いることについては、難波(2008)をはじめとして、その問題点について多くの指摘がなされている。学習者が教師の意図を汲み、そこから外れないように自己を表出させることや、また教室において他の学習者らを気にして「本当の」自己を隠して、本意ではない自己を表出させるといった問題を指摘するものである。教室において文学的文章を読むという行為が、学習者自身にとって「私」という存在を追究するものとはならず、他者の期待に沿う読みにとどまってしまうという問題がここには述べられているのである。そこには「その場の空気を読んで、ウケをねらう」といったように、その場の他者の評価を得ることによってしか、自己承認を得ることができないという問題点が潜んでいるとされる(土井,2009,pp14-15)。また永田(2009)も、国語教育と「自己」とは深い関係性をもちながらも、国語教育研究における「自己」に対する議論が不十分であることを指摘している。これらのような問題に対して難波は、自己同士の関係性という観点から言及を行っている。また永田は国語科の先行研究における自己観を抽出したうえで、国語教育における新たな自己観を提案している。両者ともに精緻な調査・分析によって導き出された、優れた先行研究である。しかし両者による研究では学習者の「自己」を複数かつ流動性のあるものであると捉えている一方で、それらの複数の自己がどのように対話するのか、またそれによって何が生みだされるのかという「過程」に関する言及については十分ではないと考える。

そこで本稿においては、複数の自己間の対話の過程に焦点をあて、文学的文章の読みにおける読者の「自己内対話」について検討することを目的とする。方法としては、はじめに文学的文章の指導における学習者の「自己内対話」について考察する際の有効な手がかりとして「対話的自己」概念を検討する。次に、国語教育学領域における読者の「自己内対話」に関する先行研究を整理する。

最後に具体的な文学的文章を用いながら読者の「自己内対話」の過程について反応分析を行うことによって検討することとする。このように、「対話的自己」概念を援用して読者の「自己内対話」の過程を明らかにすることは、「自立した読者」育成における学習指導のあり方を検討する上で手がかりとなりうる。

2 「対話的自己」論の検討

ポストモダン社会に見られるアイデンティティとして複数化・断片化・流動化したアイデンティティ観が指摘され(溝上,2008 など)、そこで重要な事柄としてアイデンティティ形成の場が「多」領域化していることを挙げており、「自己」をめぐる問題が複雑化していることが示されている。このような社会状況の中で提唱されたものが、心理学者ハーマンスらによる「対話的自己」論である。

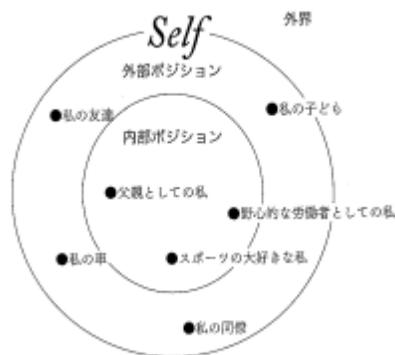
「対話的自己」論はハーマンスらによって 1993 年に刊行された *The Dialogical Self* のなかで展開された論であり、2006 年に溝上らによって訳書『対話的自己—デカルト/ジェームズ/ミードを超えて』として出版され、溝上(2008)等で既に検討がなされている。

この「対話的自己」論は、W.ジェームズや G.H.ミードらの自己論を基としながら、そこに M.バフチンの「多声性」の考え方を統合させた自己論である。「自己」を「複数の I ポジション」として捉え、またその I ポジションを移動しながら、他の I ポジションとの間で対話が行われると説明する。I ポジションとは下の図 1 (溝上,2008,p114)に黒丸(●)で示されているような様々なポジションのことである。下の「対話的自己における内部・外部ポジションと外界」の図は自己内における様々な I ポジションのイメージを図示したものである。

このようにハーマンスらは自己を分権化された複数の I ポジションであると捉えている。ハーマンスらによれば自己の世界は大きく二つの円世界(内部ポジション/外部ポジション)にわけられる。「内部ポジション」は「私」だと感じられるさまざまな「私」ポジションを示し、「外部ポジション」は「他者ポジション」「モノポジション」と呼ばれるものを示す。この「外部ポジション」と呼ばれるものは、自らの外部にある客観的な存在を示すものではなく、外界に存在しているものを自己世界の内に取り込んだものである。このように自己の世界に存在する様々な位置をとることができる点に特徴が見られる。

「対話的自己」論の特徴として、ハーマンスらは著書の中で以下のように述べる。

全知の一極集中化された I が存在しないという限りにおいて、自己とは分権化されたものである。というよりも、「分権化された多声性 *decentralized manyness*」の I ポジションであり、それぞれの I ポジションは声を持ち、それぞれの Me についての独自のストーリーを語るができる。I は想像上の風景のなかを、多声的な自己における対話的關係が可能になるような仕方で、あるポジションから他のポジションへと移動するのである。(H.Hermans&H.Kempen,溝上他訳,2006,p6)



【図 1：対話的自己における内部・外部ポジションと外界】

ここでは2点のことが強調されて述べられている。1点目は「自己の世界に存在するさまざまな「私」、他者、モノを「ポジション(position)」として変換する点」、そして2点目が「変換されたポジションどうしの関係を、「声(voice)」によってつなぐ点(対話的關係)」である。

このように、Iポジションごとに声(voice)を持っており、それらの声が決して同一の、また矛盾しないものではないということが重要である。そこではあるIポジションから見た他のIポジションは「他者」となるのである。ここでは「内部—外部」での対話にとどまらず、「内部—内部」「外部—外部」また二つ以上の複数のポジション間での対話も起こりうるものであると想定されている。つまり自らの中で支配的であった声が、支配的でない他のポジションの声と対話することによって、支配的でないポジションの声の持つ意味を再評価したり、再発見することにつながるものであると言えるだろう。ここまで見てきたように、自己の世界が分権化され、さまざまな自己を認めつつ、そこにポジショニングして「他者」である他のポジションの「自己」と対話することによって、さまざまな発見や葛藤が生まれ、自己形成がなされると考える点、また「自己内対話」を「複数Iポジションどうしの声の交換」として理論化されている点において、ハーマンスらの論はこれまでの自己論を超え、現代における「自己」を考えるにあたって意義のあるものであると考えられる。ではこのような「自己」を語る際のモデルとして提案されてきた「対話的自己」概念を援用して、文学的文章を読む際の自己内対話のモデルを構想した際にはどのようなになるであろうか。本稿においては、読者が「自己」というものを見つめたり振り返ったりする際に大きな要素となる「登場人物」に焦点をあてて考えてみたい。「登場人物」に寄り添ったり、少し離れたところから眺めることによって、読者は物語世界に浸りながらも自らを見つめたり振り返ったりすることはこれまでの先行研究においても述べられてきている(府川,1995など)。この「登場人物」は、「対話的自己」概念を援用した文学的文章を読む際の自己内対話のモデルにおいてはどのように位置づくのであろうか。

3 文学的文章を読む際の読者の自己内対話モデル

読者は文学的文章を読む際にさまざまなIポジションに立っていると考えられる。例えば家で一人で読んでいる際のポジション、学校の授業のなかで読んでいるポジション、誰かと意見を交換するために読んでいるポジション。これらのポジションはハーマンスらの「対話的自己」論における「内部ポジション」にあたりと考えられる。このように読者はさまざまな「内部ポジション」に立つことが考えられる。

では実際に文学的文章を読んだ際の「登場人物」はどのように位置づくのであろうか。例えば「山月記」における語り手は「外部ポジション」に位置づくと言える。そのポジションにおいては「李徴は隴西の出身で若くして中央の役人となり・・・」といった「声(voice)」を持つこととなる。そしてそこで語られる登場人物も「外部ポジション」に位置付く。このように考えた際に「李徴がかわいそう」や「李徴は最低な奴だ」などといった感想は、さまざまな「内部ポジション」のうちのどれかから「外部ポジション」である李徴を眺めた際の「声(voice)」であると説明することができるのである。

また文学的文章の学習の場面を想定した場合には、他の学習者の意見というものも「外部ポジション」に位置づくものであると言える。「外部ポジション」としての他の学習者/読者の意見(声(voice))を「内部ポジション」から眺めることによって、そこに対話が生じると説明することができる。

先にも述べたように、「対話的自己」概念を援用して読者の「自己内対話」の過程を明らかにする

ことは、「自立した読者」育成における学習指導のあり方を検討する上で手がかりとなるものである。

4 読者の自己内対話に関する先行研究

ここまで「対話的自己」論の概要について考察し、それを援用して文学的文章の読みにおける読者の自己内対話モデルについて検討してきた。ここまで述べたように、さまざまな I ポジション間の対話を活性化するものとして文学的文章の価値があると言える。「自己内対話」という観点から文学的文章の持つ価値について考察したものとして丹藤(2001)と山元(2005)によるものが挙げられる。

丹藤(2001)は文学的文章の「他者性」に目を向け、その事が読者と文学的文章との対話を促すものであるとして以下のように述べる。

われわれの日常の言語活動あるいは読むという行為において、主体は〈わたし〉の内部にあるのではなく、他者という外部にあるのだとすれば、対象となるテキストにおける〈主体〉とは何かを明らかにしておかなければならない。(中略：稿者)作品のプロットを無視したり、コンテキストをねじ曲げたりする読みに他者は浮上してはこないだろう。作品を自己化するのではなく、対話の相手としての作品の〈主体〉を立ち上げる(措定する)必要がある。(丹藤,2001,p164)

つまり、文学的文章が読者と「対話」関係になることを認めつつも、一方で文学的文章とどのように向き合うことで「対話」関係になるのか、また自己内対話を引き起こすことになるのかについて検討しようとしたものであるといえよう。このことについては山元(2005)も以下のように述べている。

文学の授業において、そのような相互作用を導き、〈対話〉を成り立たせるためには、さまざまな条件が必要となる。たとえば、前節で検討したように、テキストの〈対話喚起性〉を捉えて、それをきっかけにして教授＝学習を構成していくということは、テキストと学習者との相互作用過程を活性化していく上で十分に意味のあることである。(山元,2005,p624)

山元は「個としての読者の、教材との一対一」の〈対話〉を「内的〈対話〉」、「他者である教室の仲間の「読み手たち」との間に生ずる対話」を「外的〈対話〉」であるとして、文学的文章はこれら「内的〈対話〉」「外的〈対話〉」を導く属性を持っているとし、これを文学的文章の〈対話喚起性〉と呼んでいる。このようにして喚起された自己内対話によって生み出されるものとして、山元は以下のように述べている。

ぶつかりあい、というのは闘いという意味ではない。そうではなくて、異なるものが併置されることによって何ごとかが産み出されるありさまを言うのである。学習という営みは、おそらくそのようなぶつかりあいが個人内であるいは個人間でなされることによって進んでいくはずのものである。もちろん、〈認識の変革〉というふうな強いことばをここで用いようとは思わないし、自らの現在の水準を超えるものに出会って、それをすぐに自分のものとしていくかたちで学習が進んでいくというふうにも考えてはいない。(山元,2005,p624)

異なるもの同士が自己内において対話することによってこれまでにはなかった新たなものが生み出される場合もあるという点が述べられている。常に新たなものが生み出されるというわけではなく、そこに可能性があるという部分が重要であろう。このような自己内対話が活性化される条件に関して山元は以下のように述べる。

主体の内部で〈対話〉がはぐくまれるのは、主体の内部に〈複数性〉が存在するからにほかならない。主体の内部に統合することの困難な〈複数性〉が生じ、それを統合しようとする心の動きが生まれるからこそ、主体の内部は活性化される。(山元,2005,p625)

「内省のフォーラム」とは、「内省」による自己内部での話し合い過程のことだ。そうした自己内の不均衡なり、矛盾・葛藤なり、衝突なりということが「自我の成長」を招き、「新しい対象に対応する新しい自我」を生み出す、というわけである。(山元,2007,p296)

ここでは、複数の自己同士が対話を行うことによって「不均衡・矛盾・葛藤・衝突」を引き起こすことで、自己内対話が活性化され、新たな発見や自らに関して深く思索することにつながると思われる。このような「不均衡・矛盾・葛藤・衝突」といった、自己内対話を活性化させるものとして、文学的文章に価値があることを丹藤・山元は述べているのである。

上に取り上げた丹藤(2001)や山元(2005)は、文学的文章の〈対話喚起性〉という観点から読者の「自己内対話」について言及していた。一方、濱田(2008)は共同的学习によって学習者の内になされる自己内対話の過程について明らかにしようとしている。

濱田(2008)では、生徒個人での感想の書き込み(1次記述)の後、感想を他の生徒の感想との交流を踏まえての書き込み(2次感想)を行い、その2次感想に線を書き込む(3次感想)ことをさせている。そしてその3次感想として書き加えられた記述を基に、生徒の自己内対話の過程について明らかにしようとしている。そこでは他者の言葉を取り込む際に、他者の言葉と自己の言葉との関係性によって、生徒は作品のことばに会い直すという姿が描き出されている。つまり、教室内の他の学習者との対話によって自己内対話が活性化されるということを実際の学習者の書き言葉を基に明らかにしているのである。

5 先行研究に残された課題

ここまで見てきたように、読者の「自己内対話」に関しては様々な先行研究が存在している。ここでは文学的文章が読者の自己内対話を活性化させる文学的文章の〈対話喚起性〉が示されていた(丹藤(2001)山元(2005・2007)がこれにあたる)。しかしながら、そのような文学的文章を教室で読むことによって、他の学習者の意見や感想が「自己内対話」を活性化させる契機となることが述べられている(濱田(2013)がこれにあたる)一方で、学習者内の複数の自己間における「自己内対話」の過程については具体的な姿が十分に示されているとは言い難い。つまり、複数の自己同士での「自己内対話」によって「不均衡・矛盾・葛藤・衝突」が引き起こされる過程、またそれらが新たなものを生み出す過程についてのより詳細な検討が必要であると考えるのである。

そこで以下においてはハーマンスらの「対話的自己」論を理論的基盤としながら、文学的文章の読みにおいて読者の内での「自己内対話」の過程について、大学生の具体的な文学的文章の読みを提示しながら明らかにしていくこととする。

6 読者の自己内対話の過程の検討

以上のような問題意識を基に、読者の自己の複数性に目を向け、読者の自己内対話の過程を明らかにすることを目的として国語の教員養成コースに所属する国立大学1年生4名を対象として調査を行った。

6-1 調査方法・調査文章・調査項目に関して

調査方法は、文章を読んでもらった後の調査協力者ごとの質問紙に対する記入と記入終了後のインタビューを録音するという方法をとった。質問項目は以下の通りである。

今回、調査するにあたっては江國香織「藤島さんの来る日」（「つめたいよるに」収録）の文庫本をコピーしたものをを用いた。その際に「つめたいよるに」との表記が見えないように調査者が修正したものを配布した。「藤島さんの来る日」は主人公「千春」とその部屋にやってくる「藤島さん」の関係を千春に飼われている猫の視点から描いた作品である。本文中に千春と藤島さんの関係性について明確に言及されている場面はないものの、「藤島さんの奥さん」などの記述から二人は不倫関係にあることが類推される。一読すると「不倫の善悪」に関する話のようにも読めるこの文章であるが、千春の言動などに注目していくと愛や人間関係、ジェンダー観や幸福、生き方などそこには様々な問題が含まれていることが分かる。そのような人間の問題を語り手である猫が一步ひいた猫の視点から皮肉ったり批判したり同情するこの作品は、学習者の対話を喚起する上で適した作品であると考えられる。また、分量もおおよそ3～5分程度で読むことのできる短い文章であるということもこの作品を選定した理由である。

質問項目については、以下の8つについて答えてもらった。

質問1 文章を読んだの感想を教えてください。

質問2 登場人物の「千春」についてあなたはどのように評価しますか。

左の1～4の中からもっともあてはまるものに○をつけてください。

←	好き					嫌い	→
	1	2	3	4			

質問3 どのような点から右のように判断しましたか。箇条書きで3点あげてください。

質問4 質問2のように判断した理由として質問3で3点を挙げてもらいましたが、その3点のうち、あなたのなかで重要度の高いものから①～③の番号を【 】内を書いてください。

質問5 この3点はあなたのどのような価値観や考え方から挙げられたものだと考えますか。3点それぞれについて教えてください。

質問6 質問5で書いてもらった自分の価値観や考え方を客観的に見た際に、それらをどのように考えますか。それぞれについて教えてください。

質問7 質問2から質問6までで答えてもらったことを踏まえて、登場人物「千春」についてどのように考えるのかを教えてください。

質問8 ここまでを踏まえて、作品全体の感想を教えてください。

質問の手順に関しては以下の通りである。また各手順の右端に示した時間はそれぞれの項目にかかった所要時間である。

- ①「藤島さんの来る日」を各自で黙読してもらう。(5分)
- ②質問1に記入してもらう。(5分)
- ③質問2に記入してもらう。(1分)
- ④質問3に記入してもらう。(3分)
- ⑤質問4に記入してもらう。(2分)
- ⑥質問5に記入してもらう。(6分)
- ⑦質問6に記入してもらう。(6分)
- ⑧質問7に記入してもらう。(5分)
- ⑨質問8に記入してもらう。(5分)
- ⑩各被験者に自分の書いたものをもとにしながら話してもらい、理解しにくいと調査者が感じた部分などに関して「それはどういうことですか?」のように補足の質問をする。この際、他の被験者の方にもその話を聞いてもらう。

質問1・質問8に関しては全体の感想を聞くものである。調査前後の感想の変化をとらえるために設定したものである。

質問2～7に関しては登場人物「千春」に関する質問である。先にも述べたように、「登場人物」は読者が自らを見つめたり振り返ったりするにあたって重要な要素であるため、ここではこのような質問を設定した。以下に質問2～7の設問の意図を述べる。

質問2は調査協力者の立つIポジションを明確にするための手続きとしての質問である。これを踏まえて質問3において調査協力者が自らの立つIポジションを明示しやすいようにしている。ここでは3つのポジションを挙げてもらっている。質問4においては、どのポジションが調査協力者のなかで権威的(声の大きい)ポジションであるのかを判定するために設定した。質問5においては挙げてもらった3つのポジションそれぞれの「声」を表出してもらうためのものである。質問6においてはそれぞれのポジションを客観的に他のポジションから眺めてもらうために設定した。質問7に関してはここまであげてもらった様々なポジションの声を統合し、自己内対話によって得られたものを表出してもらうための設問である。以上のような意図から質問を設定した。このように様々なポジション間での対話が行われることによって、自らを振り返り自分を捉える事や、新たな発見が起きるのではないかという仮説のもと調査を行った。

6-2 調査結果

ここでは「他の内部ポジションから今までのポジションと自己内対話を行った」と捉えられるYさんの事例と「他の外部ポジションに立つことができた」と捉えられるSくんの事例の二つを取り上げて考察することとする。

6-2-1 他の内部ポジションから今までのポジションと自己内対話を行う(Yさんの事例)

○調査協力者Yさんの例

Yさんは初発の感想において、「猫の視点で語られている」という作品構造の問題と「不倫」また「お母さんが嫌い」という一文に関する疑問といった感想を述べていた。以下、質問用紙に記入されたこととインタビューでの応答を基に検討する。そのあとの質問2においては千春への評価を2(好き寄り)と評価し、

- (1)好きな人に対して一生懸命
- (2)好きな人に対して必死でつくろう
- (3)逢瀬を終えて現実にもどっている場面が素敵

という三点をその理由として述べている。(2)に関して、千春に対してマイナスの評価をした理由があると述べている。質問 6 において、そこに現れている自らの価値観や考え方を客観的に見た際に以下のように述べている。

- (1)不安定なものが日常の一ページとして切り取られていることに魅力を感じる。
- (2)虚栄心と自尊心などのゆれ動きに共感したのではないか。
- (3)幸福の後の虚無感を打ち消そうとしている姿に好感を持ったようだ。

(1)では、猫の目によってこの不安定ともいえる関係が日常の一コマとして切り取られていることに魅力を感じていると述べている。(2)に関しては「千春の藤島さんにたいして繕っている行動は「友だちとして」は嫌いだ、繕おうとする考え方は女性として共感できる」とインタビューの中では答え、「同族嫌悪ですかね」と述べていた。(3)は藤島さんの帰った後の千春の言動に対して好感を持っていることを分析している。

質問 7・8 において「自らが千春に共感するのはなぜか」という視点からの記述が多くみられる。

質問 7 において

虚栄心や自尊心、虚無感など、決していいとは思えない感情に人間味を感じる。

日々の生活に甘んじている千春と自分を重ね合わせて共感できる。

質問 8 において

藤島さんと千春の「愛」といったことは話の中心にはなく、その「愛」に付属している自尊心や虚栄心などのマイナスの感情に目が行ってしまう。また誰しもが持っている感情であるために、感情移入もしやすいと思った。

では以上のことを 3 章において検討した「文学的文章を読む際の自己内対話モデル」に当てはめて考えてみたい。

始めに Y さんは「千春」という登場人物を外部ポジションとし、その I ポジションを内部の I ポジションから眺めていたといえるであろう。その際には Y さんは千春の一生懸命な部分や人間臭さといった部分に共感をしているため、似たような自分としての I ポジションから千春を眺めて肯定的な評価をしていたといえるだろう。しかしそのような I ポジションを客観的に見る、つまり他の I ポジションに立った場合に、「同族嫌悪」的な要素もあることを述べる。そこには千春の虚栄心や自尊心といった「きたない部分(Y さんの発言より)」に対して、自分を重ね合わせて共感する一方で、そのような行動をする女性としては嫌いだという自らの考え方を客観視するものの見方があらわれているだろう。

このように、今まで自らが立っていた I ポジションを他の I ポジションから眺めることによって、自らが千春に共感するに至った理由を見つめ直し、人間味や自分と重ね合わせて「わかる」という共感的な読み流されてきたことを述べている。質問 8 の記述について補足を求めた際に、Y さんは「千春ちゃんの自尊心や虚栄心などのマイナスの感情に目が行ってしまった。藤島さんと千春ちゃんとの愛についてもっと深く読んでいけばもっと(感想が：稿者補)出てくるかも」というように述べた。このことは千春ちゃんの自尊心や虚栄心にばかり目が行きがちであった今までの内部ポジ

ションのみならず、他の内部ポジションからも千春ちゃんを、また新たな外部ポジションとして藤島さんを眺めることの必要性について述べているものであると判断できる。このように千春に対する自らの共感を客観的に見た際に、そこに存在する価値観や考え方に目を向けることができている、それを価値づけることができているという点において、他のIポジションから今まで自分がポジションニングしていたIポジションを眺め、対話をするというYさんにおける自己内対話の姿があらわれていると考える。

6-2-2 他の外部ポジションに立ち、そのポジションを眺めることができる(Sくんの事例)

○調査協力者Sくんの例

Sくんは初発の感想において、千春が好きな人の前で「自分を良く見せよう」という世間一般の考え方とは逆の行動をしていることに注目している。むしろそのように自分をよく見せずに自分の嫌いなことはしないという点に魅力を感じていると述べている。そのあとの質問2においては千春への評価を2(好き寄り)と評価している。ここではSくんが質問3において挙げた理由を起点として分析を行いたい。

質問3

(1)藤島さんの前でよく見せようとするのではなく、悪く見せる(?)ようにして、本当の姿を隠す点に少し恐さを感じる

質問5

(1)その行動が正しいか間違っているか、良い結果を生むかどうかではなく、自分の考えで、自分の行動ができる人はかっこいいし、自分もそうなりたいから。

質問6

(1)行動してしまうと、自分だけでなく、他人にも影響を与えるので、自分の考えを貫いて行動するばかりではいけないのではないか。

このように述べた後に、これらを統合する質問7の場面においては「変わった女の子だとは思いますが、自分の価値観を明確に持って行動しているので、あまり考えずに人に良く思われようと動いたり、流行に乗るだけの人よりもよっぽど魅力があり素敵だと思う」と述べている。このように見ると、千春に対する思いには変化が見られないように見えるが、質問8においてSくんは以下のような記述をする。

質問8

(前略：稿者)ただ藤島さんは千春の嘘に気づいてないのかと思った。

このことに関してインタビューの際に補足を求めた。するとSくんは以下のように述べた。

「全部すんなりスーっと通りすぎていて、ちゃんと話が進みすぎていて、千春ちゃんが無理していたらもう片方も絶対何か、こう、無理していないと、ここですんなりと進まないのかなって思って。うそに気づいて、あえてそれも乗っかっているのかなって、ちょっと思いました。まあ絶対じゃないけど。全く気付かずにこうやってするのかもしれないけど、もしかしたら藤島さんもちょっとは、少しだけ気づいていて、全く描写はないですけど、なんか気づいて、気遣っているのかなって言うふうになんかちょっとだけ思いました。」

このことは質問6における記述と関係があると考えられる。「他の人に影響が出る」という考え方

を「千春と藤島さん」という関係性に当てはめ、千春が無理をしていたら藤島さんも多少無理をしていなければこのようにすなりとこの関係が続くはずがない、という考え方をしている。このような観点はそれまでの質問に対する記述からは見受けられない。このように、それまでの内部ポジションから外部ポジションである「千春」を眺めているだけではなく、「自分の考えを貫いて行動するばかりではいけないのではないか」という新たな内部ポジションから千春を眺めることによって「藤島さん」という新たな外部ポジションを眺めることができおり、その自己内対話によって、「藤島さんもちよっとは、少しだけ気づいていて、(中略) 気遣っているのかなって言うふうになちよっとだけ思いました。」というような新たな発見がなされていると言えるだろう。このように、他の内部ポジションをとることや、他の外部ポジションに目を向けること、またそれによって新たな発見が導かれているという所にSくんの自己内対話の姿があらわれていると言える。

7 「文学的文章を読む際の自己内対話モデル」を基とした読むことの学習指導に向けて

ここまで、「文学的文章を読む際の自己内対話モデル」を理論的基盤として、文学的文章を読む際の自己内対話の過程の具体的な姿とそれによって生み出されるものについて検討してきた。

ここでは「他の内部ポジションから今までのポジションと自己内対話を行う」ことや「他の外部ポジションに立つ」ことによって、読者のうちに新たな発見や自らを振り返ることが行われることが明らかとなった。では、これらのことから「複数のIポジション」を意識した学習指導のあり方はどのように考えることができるだろうか。まずここで明確にしておきたいことは、今回の調査で用いた「藤島さんの来る日」を教材化するという観点から考察を行うわけではないということである。「藤島さんの来る日」では「不倫」が題材となっており、この作品を今回の調査で用いたように教室に持ち込むことはあり得ない。ここで「藤島さんの来る日」を用いた調査を行ったのは、あくまで「成熟した読者の自己内対話の過程」を明らかにするためである。そこで、今回検討した「成熟した読者の自己内対話の過程」モデルを基にしながら、学習者の自己内対話を活性化させる学習指導を検討するにあたって、ここでは「教材・自己内の複数のポジションに立つこと・他の学習者との対話」という3点から考えていきたい。

まず一点目に、今回用いたような様々な問題を内在しており、対話を喚起する力を持った教材を選択するという点である。今回は大学生相手であったため、高校生を対象とした際には様々な検討が必要であろう。先にも述べたように「不倫」といったものを扱う文章を、今回の調査で用いたように教室に持ち込むことはあり得ない。しかしながら、人間らしい姿や判断に困る・または葛藤がおこるような文章を用いる必要があると考える。さらに、語り手がこのような登場人物達を引いてみているような文章であることも条件の一つであると考えている。異なったIポジションに立つことによって新たな発見や深い読みが生み出される文章を用いることが、学習者の自己内対話を活性化させるためには必要な要素であるといえる。

二点目は、複数のIポジションに立つための練習や発問についてである。今回は複数のポジションに立つための練習などを行わなかったが、その事が上手くできていなかった調査協力者にはあらたな発見や自らの振り返りということがおこりにくいということが今回の調査ではわかった。今後はそのための手立てを考えていく必要があるだろう。しかし一方でそのようなポジションにたてた際には読者は自己内対話を活性化させ、新たなものを生み出すということも分かった。このことから、今回調査に用いた質問をより改良する形で学習指導について検討していきたいと考える。

三点目に、他の学習者との対話である。このことは先にも述べたように、他の学習者が読者内の

外部ポジションに位置づく存在であるためである。他の学習者の感想や意見と自らとが対話を行うこと、また異なった内部ポジションから他の学習者という外部ポジションを眺めること。さらには他の学習者同士という外部ポジションどうしの対話を内部ポジションから眺めることによって、より自己内対話は活性化され、新たなものを生み出す契機となると言えるであろう。今後は、今回の調査の一週間後に行った4名の調査協力者同士の話しあいのデータも用いながらこのことについてより詳細に述べていきたい。

【注】

1 溝上(2008)に掲載されているこの図は(Hermans&Hermans-Jansen,2003,p544,Fig23-1)を基にして溝上が作成したものであり、Hermansら(2003)の図と同一のものではないが、溝上(2008)における図は、Hermansら(2003)の図の中にHermansらの挙げている具体例を補足して示しているものであり、内容として一致するものであると稿者が判断したため、ここでは溝上(2008)より図を引用している。

主要参考引用文献

井上俊・船津衛〔編〕(2005)『自己と他者の心理学』有斐閣アルマ

梶田叡一・溝上慎一〔編〕(2012)『自己の知り学を学ぶ人のために』世界思想社

丹藤 博文(2001)『他者の言葉—文学教育における批評行為の成立—』学芸図書株式会社

土井隆義(2009)『キャラ化する/される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット

永田麻詠(2009)「国語教育における自己観の考察—新たな自己観の構築に向けて—」『国語教育思想研究』1号 pp11-20

難波博孝(2008)『母語教育という思想—国語科解体/再構築に向けて』世界思想社

濱田秀行(2013)「物語を共同的に読む授業における生徒の自己内対話—読みの交流に書くことを取り入れた高等学校国語授業の分析—」『読書科学』第55巻第1・2号合併号

浜本純逸(2001)『文学教育の歩みと理論』東洋館出版社

府川源一郎(1995)『文学すること教育すること』東洋館出版社

船津衛(2011)『自己とは何か—「自我の社会学」入門』恒星社厚生閣

溝上慎一(2008)『自己形成の心理学—他者の森をかけ抜けて自己になる』世界思想社

山元隆春(1994)「読みの「方略」に関する基礎論の研究」『広島大学学校教育学部紀要 第1部』第16巻 pp29-40

山元隆春(2005)『文学教育基礎論の構築—読者反応を核としたリテラシー実践に向けて』溪水社

山元隆春(2007)「5節 教材研究」難波博孝『臨床国語教育を学ぶ人のために』世界思想社 p288-300

H.Hermans,H.J.M.&Hermans-Jansen,E.(2003). Dialogical processes and development of the self. In J.Valsiner&K.Connolly(Eds.)Handbook of developmental psychology.London: Sage:pp534-559

H.Hermans&H.Kempen 著 溝上慎一・水間玲子・森岡正芳訳(2006)『The Dialogical Self 対話的自己 デカルト/ジェームズ/ミードを超えて』

(広島大学大学院博士課程後期3年)